

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

外国語・言語学参考図書解題

Kornhauser Yukako

- I はじめに
- II Bibliographies
- III Abstracts and current awareness services
- IV Dictionaries
- V History
- VI おわりに
- I はじめに

参考図書の評価・選択はよりよい蔵書構成を目指す上でも重要な問題の一つである。ここでは数多くの外国語・言語学の参考図書のなかから十数点を選んで解題を行なってみた。選択するにあたってはRogers, A. Robert. *The humanities: a selective guide to information sources* (2nd ed. Libraries Unlimited, 1979) に挙げられている外国語・言語学に関する参考図書のうち, Walford's *guide to reference material*, 4th ed. と *Guide to reference books*, 10th ed. の両方に収められているもの, またはそのどちらか一方にしか収められていなくてもノートルダム女子大学図書館に所蔵されているもの, という基準で行なった。

II Bibliographies

Bibliographie linguistique, des années 1939/1947-, publiée par le Comité International Permanent de Linguistes. Utrecht, Spectrum, 1949-. v.1-. Annual.

標題紙の英文書名: *Linguistic bibliography...*

包括的な言語学の書誌。第1巻では南アフリカ, ベルギー(フラマン語の出版物), チェコスロバキア, フィンランド, フランス, イタリア, オランダ, ノルウェー, ポーランド, スイスにおける言語学の諸分野の図書, 評論誌, 雑誌記事をあげている。第2巻では, オーストリア, ベルギー(フランス語), デンマーク, イギリス, ギリシャ, インド, アイルランド, ポルトガル, ソ連, スウェーデン, トルコ, アメリカ等からの記事も含まれている。1, 2巻とも著者索引がついている。資料は大項目, 小項目と詳細にわけられている。1977年版(1980年刊)には14,400の見出語があった。この書誌での雑誌論文の包括的なとりあげられかたは特に評価できる。件名索引に欠けるが詳細な目次が完全とはいえぬまでも件名索引的な役割を果たしている。

Kennedy, Arthur Garfield.
Bibliography of writings on the English language from the beginning of printing to the end of 1922. Cambridge, Harvard Univ. Pr.; New Haven, Yale Univ. Pr., 1927.; repr., Books for Libraries, 1973. 517p.

13,402項目にわけられた大変包括的な書誌。著者索引、批評家索引、件名索引がついている。本書は長年定評のある書誌とされてきた。また、A "review with a list of additions and corrections"として Arvid Gabrielson による追加・訂正が *Studia neophilologica* 2: 117-68 (1929) に発表された。しかし、現在、特に1800年以前の書誌に関しては R.C. Alston の A Bibliography of the English language from the invention of printing to the year 1800 (E.J. Arnold and Son, 1965-) の評価が高まっている。

III Abstracts and current awareness services

LLBA/Linguistics and language behavior abstracts. New York, Sociological Abstracts, Inc., 1967-. v.1, no.1-, Quarterly. (v.0, no.1 が v.1, no.1 の発行前に見本誌として出版されている。1985年までは LLBA/Language and language behavior abstracts. の誌名で刊行。)

国際的な協力によって生まれた抄録誌。言語学、心理言語学、構造言語学、記述言語学、言語哲学、記号論、文体論、言語・文字によらない伝達、心理学、人間関係論、心理測定学、特殊教育などの分野における数多くの雑誌からの抄録を載せている。例えば、第12巻(1978年刊)には6,045抄録が収められている。著者索引、件名索引、書評索引、出典誌索引が各号についている。年刊の累積著者

索引、件名索引、書評索引、出典誌索引も発行されている。また、1977年から加除式の A user's reference manual が発行されており、マイクロフィルム、複写サービス、オンラインサービスも行なわれている。

The year's work in modern language studies. Edited for the Modern Humanities Research Association, 1929/30-. London, Oxford Univ. Pr., 1931-40; Cambridge Univ. Pr., 1951/63; MHRA, 1964-. Annual.

＊ロマンス語・ゲルマン語・スラブ語の言語学・文学における最近1年間の研究と出版物の評論的概説である。(Guide to reference material, 3rd ed., v.3, p.207) ＊例えば、v.42(x, [1], 1320p) では1. 言語学一般 2. ラテン語 3. ロマン語 4. ケルト語 5. ゲルマン語 6. スラブ語の6節が収録されている。ラテンアメリカ研究は1964年版からつけ加えられた。省略語一覧、件名索引、名称索引がついている。

IV Dictionaries

Bernstein, Theodore Menline. Bernstein's Reverse dictionary. With the collaboration of Jane Wagner. [N.Y.], Quadrangle, [1975]. 277p.

語の定義や意味から利用者が求める語にむかうことのできる英語の逆引辞典。例えば、"faster than the speed of sound (音速よりも速い)" という意味の語を求めるときに、この辞典では "Faster..." の項のもとに "supersonic (超音速の)" という語を見つけることができる。＊従来の辞典は語をアルファベット順に並べ、その意味を示している。この従来のものとは異なる辞典では意味のほうをアルファベット順に載せ、そこにその意味をもつ語を示している

(本書 p. vii) * のである。

その他の従来とは異なったタイプの辞典として次のようなものがある。

-ologies and -ism; a thematic dictionary, edited by Howard G. Zettler, (Gale, 1978).

A dictionary of collective nouns and group terms, compiled by Ivan G. Sparkes, 2nd ed., (Gale, 1985).

Dictionary of pronunciation, by Abraham and Betty Lass, (Quadrangle, 1976).

The New York Times manual of style and usage, edited by Lewis Jordan, (Quadrangle, 1976).

Bliss, Alan Joseph. A dictionary of foreign words and phrases in current English. N.Y., Dutton, 1966; repr., London, Routledge, 1983. 400p.

現代英語にみられる外来語の辞典。5,000以上の見出語のもとに、語の起源、定義、または訳文、はじめて英語に伝えられた年代、現代の語法、発音、複数形等が示されている。本書はどのように外来語が英語化されたかを見分けるか、発音について、また文法的にどのように扱うか、その語がどのように綴られ翻字されるべきかが、他の辞典よりも詳細に述べられている。何が、いつ、外国語から借入されたかを示す分類表もついている。同じく数ヶ国語を扱う辞典には次のようなものがある。

Jerzy Gluski. Proverbs: a comparative book of English, French, German, Italian, Spanish and Russian Proverbs with a Latin appendix. (Elsevier, 1971).

C.O.S. Mawson. Dictionary of foreign terms, revised by

Charles Berlitz. (2nd ed., Crowell, 1975).

Chantraine, Pierre. Dictionnaire étymologique de la langue grecque; histoire des mots. Paris, Klincksieck, [1968-80]. 4v. (1968-.v.1-.v.1-4 (1968-80) :A-U).

ギリシア語における語法辞典。B.C. 2,500年代から現代までのギリシア語の中で使われている1,369語を見出語として、その用法を集めてある。古典の著作からの引用句や献辞なども示してあり、語源や複合語も挙げられている。参考文献として言語学や史的言語学研究の図書や雑誌があげてある。

Simon and Schuster. International dictionary. (Diccionario internacional Simon and Schuster). English/Spanish, Spanish/English. Tana de Gamez, ed. in chief. N.Y., Simon and Schuster, [1973]. 1,605p.

約200,000語収録の英-西、西-英辞典。スペイン語と英語による序文がある。英西辞典 p. 1-884, 西英辞典 p. 885-1,605。見出語には科学用語・専門用語から口語的・方言的な表現、卑語、借入語まで含まれている。多くの固有名詞、地名、略語は巻末ではなくアルファベット順の本文中に含まれている。また、慣用句や語法を示すために多くの文例をあげてある。英語の見出語の発音は万国音標文字によって示されている。スペイン語には発音記号が個々の見出語には示されておらず、一般的な解説がついている。本書はラテンアメリカにおけるスペイン語とアメリカ英語に強い。

Hartmann, R.R.K. and Stork, F.C. Dictionary of language and linguistics. N.Y., Wiley;

London, Applied Science Pubs., [1972]. 302p.

語学教師や言語学の学生の一助となるよう意図された言語学辞典。一般の辞典では十分に定義されていない言語学の諸分野，研究法や方法論等の専門用語，関連分野，応用分野からの重要な用語を扱っている。相互参照は矢印で示されている。付録 I として百万人以上の人々が使用している言語の一覧表，付録 II として分野別書誌がついている。

研究者に役立つと思われる辞典として，*Encyclopedic dictionary of the sciences of language*, by Oswald Ducrot and Tzvetan Todorov. (Johns Hopkins, 1979) がある。

Harrap's New standard French and English dictionary, ed. by J.E. Mansion. Completely rev. and enl. ed.; rev. and ed. by R.P.L. Ledésert and Margaret Ledésert. London. Harrap; N.Y., Scribner's, [1971-80]. 4v.

第1版，仏-英の部は1934年刊。改定版1940年刊。補遺1950年，1955年，1961年刊。1947-48年にかけて Harrap's Standard French and English dictionary. の書名で出版された。英-仏の部は1939年に初めて出版されたが非常に多くの再版があり，1950-61年に3分冊で刊行された補遺がある。米国版は，*Heath's Standard French and English dictionary*. (Boston, Heath, 1962) として出版された。

「扱いやすい範囲で広い視野にたった著作(序文)」を目指して編纂された英-仏，仏-英辞典。第1-2巻(当初"part 1"とされていた部分)は仏英辞典，第3-4巻は英仏辞典である。合計250,000近くの見出語を収録している。口語体，文語体の現代フランス語，(カナダのフランス語，スイスやベ

ルギーのフランス語，口語的・方言的表現，俗語，フ랑グレー(フランス語化した英語の単語表現)や現代の科学・技術・工業用語も見出語としてあげられている。TLS(Apr. 6, 1973)では本書の第1部における新しい構成と専門用語の豊富な増補が称賛されており，また Peter Rickard は「非常に長い間，学生にも専門家にも等しく必携の書となるであろう大変綿密で信頼性のある正確な英仏辞典(TLS, May 9, 1980)」と述べている。

簡約版として *Harrap's Shorter French and English dictionary*, ed. by Perer Collin [他]. (London, Harrap, 1986. 798p.) がでている。

Oxford Latin dictionary. Ed. by P.G.W. Glare. Combined ed. Oxford, Clarendon Pr.; N.Y., Oxford Univ. Pr., 1982. 2126p.

最初，1968-82年にかけて8分冊で刊行された。

定評のある学術的なラテン語辞典。約40,000の見出語は古典ラテン語(初期より紀元2世紀末まで)を扱っている。語法を示すための引用句は年代順に配列されており，正確に出典の示された100万以上の文学作品，碑銘，その他の資料から集められている。語源に関する注釈は簡略である。構成はOEDに似ている。

Partridge, Eric. *A dictionary of slang and unconventional English, colloquialisms and catch phrases, fossilised jokes and puns, general nicknames, vulgarisms and such Americanisms as have been naturalized*. Ed. by Paul Beale. London, Routledge & Kegan Paul, [1984]. 1,400p.

俗語、語呂合わせ、時代遅れになった冗談などの特殊な語を集めた辞典。本書（1984年刊）の前の版は初版（1937年刊）の再版に累積補遺が加えられたものである。本書ではさらに増補訂正がなされ、追加された新しい見出語も本文中に組み入れられた。また、[＊]本文中にうまく配列しにくい見出語（オーストラリアのヤクザ社会の語や野鳥観察家の俗語など）[＊]が別にあげられている。見出語のほとんどは Partridge 自身によって1979年の彼の死までに集められたものであるが、1978年以後 Beale によって集められた語にはイニシャルが付されている。

Partridgeは他のいくつかの特殊な俗語辞典の著者でもある。

A dictionary of Forces' slang, 1939-1945. (London, Secker & Warburg; N.Y., Saunders, 1948. 212p.).

Slang, today and yesterday, with a short historical sketch and vocabularies of English, American and Australian slang. (London, Routledge, 1933. 476p., 4th ed. Methuen Inc.).

A dictionary of the underworld, British and American. (3rd ed. London, Routledge, 1968. 886p.).

Reynolds, Barbara., ed. The Cambridge Italian dictionary. Cambridge Univ. Pr., 1968-81. 2v. 1: Italian-English. 1962. xxix, [ii], 897, 2p. 2: English-Italian. 1981. xix, 843p.

各巻共、固有名詞を含む50,000語収録の伊-英、英-伊辞典。第1巻は300以上のカテゴリーの語と多くの慣用語が扱われている。廃語には印がついている。一般的なイタリア語の略語一覧、イタリア語動詞活用表がついている。第2巻は[＊]主に英語を話す利用者の必要を満たすよう編纂されている（序文）[＊]

米語法は最近イギリスで使われているものに関しては扱われている。専門用語、例えば経済学・社会学・政治学・哲学などの語はよく示されている。一般的な英語の略語一覧がついている。

簡約版として The concise Cambridge Italian dictionary, B. Reynolds 編纂 (CUP, 1975, lxxvii, 792p.)が出版されている。

V History

Baugh, Albert Croll and Cable, Thomas. A history of the English language. 3rd ed. Englewood Cliffs, N.J., Prentice-Hall, [1978]. 438p. il.

大学生向けの英語史の教科書。英国の政治、社会、知識上の歴史的背景をもとにその初期から現代に至る英語の歴史的発達を述べたものである。アメリカにおける英語に関する章も含まれている。この版では学問的な進歩に関する注解と最新の参考文献がついている。

VI おわりに

もともとこの解題はノートルダム女子大学図書館で学生を対象に利用指導を行なう際、参考図書の説明に役立てることができれば、と始められたものであるが、参考図書の評価・選択の一助となれば幸いである。ここではあまりにも有名な OED (Oxford English Dictionary) が扱われておらず、選択や各節の配分に多少の偏りがみられるとのむきもあると思う。しかし、OED についてはすでに数多くの著作で言及されており、敢えてここでは省かせていただいた。

尚、所蔵調査や、参考図書を読み進めるにあたってはノートルダム女子大学図書館の方に御協力をいただいたので、この場をお借りして御礼申し上げる次第である。（元ノートルダム女子大学図書館・現在サンフランシスコ在住・旧姓 福井由香子）

研究集会に参加して

前日の雨も嘘のように晴れ上がった土曜日の6月4日から5日にかけて、京都で大学教育と図書館利用の研究集会が行なわれました。テーマはオリエンテーションと文献検索ガイダンス。奉仕係に席を置く私としては、日常業務にも関係が深く、又、個人的にもこのテーマに関心があって、喜び勇んで参加しました。場所は岡崎。近くには平安神宮や美術館など名所・旧跡の多いとても環境の良い所でした。前日の雨に洗われた緑が澄みきった青空に映え、山々がとても美しく見えます。会場となった京都市伝統産業会館も、その環境抜群の中に有りました。

さて、今回のシンポジウムの報告者は3人の先生方。少々緊張した面持で座っていらっしゃいました。図書館の利用者から生の声を聞くのは初めて、きっと何か得るものがあるに違いないと、耳をながくして聞き入りました。最初は、同志社大学の田井義信先生。ご専門の法律学の立場から。法学とは積み重ねの学問であり、少人数で教員が貼りついて教えなければダメと。とても教育熱心な先生で、多人数だと責任ある指導が出来ないので少人数のゼミに徹し、その為の苦心談なども聞かせて頂きました。又、図書館は本当に熱心に詳しく勉強したい学生が行く所である、図書館を真剣に利用しないと損だと思われるシステムを作ればのご意見に、感動しました。最近図書館と談話室を感違いしているのではと思われるぐらい騒々しいグループがいます。それとも利用者は神様でしょうか？ ガイダンスについては、初歩的なものは学部の仕事であり、文献ガイダンスは学部レベルで教員が行なうべきである。図書館は、図書検索など本来の仕事に戻って欲しいとのご意見。この事は討論の所で議論になりましたが、先生と図書館員の考えているガイダンスは、違うのではと言う印象を受けました。

次は、京都大学の豊田昌倫先生。まず、イ

タリア映画「バラの名前」のお話から。

この中に14C中世の修道院の図書館が出ており、それは図書館の観点から見ると、素晴らしい映画だそうです。ぜひ見たいものです。ケンブリッジ大のスタイナー先生は、大学を構成する要素に、1.に緑、2.に静寂、3.に図書館(本)を挙げています。教育はその環境づくりも大切と言う事でしょうか？

次に、図書の選択は教員がしているけれど、最低限必要な本は自分で購入する習性があり、基本的な図書が学部図書室に入らなくなってしまふ事が起こる。指定図書を設けているが、これは学生に安心感を与えてしまい、自発的に学習に向かう意欲を削いでしまうのではないかと、又、複本購入はどの程度許されるのかなど問題点として挙げておられました。試験ともなれば、同じ本に殺到する学生がいる。昨今、複本購入大いに結構だと思うのですが…。

次に、事典や辞書など新しい物が一番良いと思っていた私は、先生の発音の変化を調べるには初版本から必要、古い出版年のものも大事にして欲しいとの話にドキッとしました。(旧版は、即書庫行にしています。)

次は、立命館大学の深井純一先生。図書館探検など企画され、学生の図書館にユニークな指導をなさっている。「図書館探検ガイドブック」を編集して学生に配布、図書館員の手を借りずに、自分の欲しい文献を探し出してくる方法で、2週間以内に「図書館探検レポート」の提出となる。最適の文献を探し当てた事よりも、その探検のプロセスを重視、評価しておられるそうだが、図書館をジャングルに見立てる所が中々面白いと思いました。探検ガイドブックは、とても判かりやすく出ています。熱心に学生の図書館利用を考え指導して下さいに、嬉しくなりました。

以上、3人の先生方の個性的で痛快なお話しぶり、とても中味の濃い内容に魅せられ、討論も含め3時間がまたたく間に過ぎてしま

いました。もう少し報告に時間が欲しかったと思います。

後の懇親会は「魚与」にて。田井先生と深井先生もご参加頂き、京料理を賞味。とても美味しかったです！それにゼミで焼芋を作りに行った話、留学されていた頃の話など、愉快的な話題が次から次へと飛び出して時の経つのも忘れ、楽しませて頂きました。宿舎は真如堂。噂どおりの素晴らしい所でした。設備・食事・環境がとても良かったです。

研究集会「大学教育と図書館利用」に参加して

1日目は、同志社の田井先生、京大の豊田先生、立命館の深井先生のシンポジウムで、収書や保存等面白く参考になりました。田井先生は図書館がなければ、ゼミは成立しない、司法試験にも通らないと言われ、豊田先生も中世文献を調べるのには図書館へ依存していると言われました。図書館員として喜んで聞いていたのですが、先生方は勉強しない学生の来ない図書館を望んでおられるようでした。しかし、図書館は全学生に開かれた場ではないでしょうか。閲覧室の騒がしいのはいろんな工夫で防ぐことはできないのでしょうか。

アメとムチで学生をしごき、学生の能力を最大限引き出そうとされている先生方に感激したまま、2日目の分科会に参加しました。冒頭で丸本先生が、あんな素晴らしい先生方でさえも、深井先生以外は図書館の利用ガイダンスは不要だと考えておられるのが現実なのですよと言われ、私は目が醒めました。深井先生が図書館探険なるものを学生に課し、図書館員に専門性を求めておられるのは、東大院生時代、農学部図書館の優れたサービスを受けられた体験によるものなのでしょうか？

丸本先生によると、利用ガイダンスについ

6日は、各大学のガイダンスの実践報告。私は3回生以上対象の方に参加しました。それぞれ利用者の為に工夫したガイダンスをしておられるのに感心しながら、聞いていました。これからの日常業務に参考にさせて頂きたいと思っています。

今回は衣食住ならぬ胃（食）職（内容）住（真如堂）にとっても満足した研究集会でした。お世話頂いた方々、本当にどうも有難うございました。（大阪支部・八木 敬子）

ての議論は全部40年代に出つくしているとのこと！又、アメリカでの図書館員の受ける訓練（①研究者がどう研究するか方法論を学ぶ、②各分野の基本文献をたき込まれる）と日本の図書館員の養成教育との落差は大きい。日本の場合、赤ん坊を海に放り込むようなものだと言われました。大阪支部例会では、海ではなく、ドブ川ではないかという話も出ましたが……。

利用指導の事例発表を聞いていて、優れた利用ガイダンスであっても、継続の保障がないところは、配転の問題があるようでした。又、閲覧係や担当者のみが担当しているところもあり、根本に図書館全体が利用者ガイダンスに取り組む姿勢が不可欠だと思いました。方法論・技術論を深めるだけでなく、大学図書館論そのものも問いなおす必要を感じた研究集会でした。後日、報告集が出るとのことですが、参加されなかった方は、ぜひ一読下さい。2日目の分科会などは、利用ガイダンスの必読文献になるのではないかと思います。（大阪キリスト教短期大学図書館・

高橋寿恵子）

大図研ゼミに参加して

私は現在、森 耕一先生のゼミに参加させて頂いている。過日、森ゼミのまとめ役

W氏から、大図研ゼミ参加の感想を求められた。そこで私なりに、なぜ参加したのだろう

とふりかえてみた。

そろそろ中堅と言われる年齢になって、もっと勉強しなければと日頃から思っていたこともある。少人数のゼミ形式で、しかも森先生のお話をじかに聞けるのは、またとないよい機会であった。

だが、一番の理由は、外の空気に触れたいこと、井の中の蛙になりたくないという気持ちからである。長年（と言ってもまだ14年ほどですが）同じ図書館で働き、よりよく毎日の仕事をこなしてゆくためには、絶えずなにか新しいものを見つけ出そうとする問題意識が必要となる。幸いにも、大図研ゼミでは、他の図書館での問題点や改善方法の事例報告や、

参加者の異なった発想・発言などに、自館の場合、自分自身の場合をあてはめて考え、触発されることが多い。

「ずっと同じ職場で飽きないの?」とよく言われる。けれども、図書館の仕事はやればやるほど、自分の未熟さがわかってくる恐ろしい仕事だと思う。最近カウンターに立つようになってそのことを痛感している。そして、ずっと同じ職場で飽きもせずやられているのは、なにか新しい発見や感動がある、そのことの魅力が大きい。これからも図書館の可能性を発見するための自己研修の場として、大図研ゼミに参加してゆきたいと思う。

(京都産業大学図書館・赤瀬 美穂)

「図書館業務におけるコンピュータの利用」を学習して

私たちは昨年、「資料組織法」を使って、AACR2の学習を行い、半年かけて、やっと終了することができました。そして、ひきつづいて何かまたやろうという話になり、グループの一人から「今一つ理解できていないコンピュータについて勉強したい」という声が出て、「これからは、避けて通れなくなっているし」と衆議一致、始めることになりました。講師はお隣のよしみで、日頃から兼任係長の役割をしてくださっている数理解析研究所の隅田さんをお願いしたところ快く引き受けてくださいました。「図書館業務におけるコンピュータの利用」という内容で、3月から約3カ月間、用語からしてよくわか

らないというやっかいな生徒につき合っていたいただきました。机上だけでなく端末を使っての学習もあり、理解が増したように思いました。多少の程度の差こそあれ、三人とも機械があまり好きな方ではないので、まだすっきり理解できたとはいえませんが、「概念がつかめた」というのが共通の感想です。図書館員としては図書館学に精通するのが土台でコンピュータはその一つの手段だという隅田さんの意見に納得。今後も時代にとり残されないよう勉強していかねばと思っています。

(京都大学基礎物理学研究所・

松本 昌子 大西 澄子
経済学部・深見 詔子)

図書館員のための情報検索講義 第3回

私が、この講義でいいたいことのひとつは、確かに、抄録誌の使い方といったことであるが、もうひとつ、抄録誌について、その構成や内容を知ることによって、私たちの図書館についてもっている考え方を再認識していくことである。あるいはこうである。つまり、私たちの持つ既存の図書館についての知識によって、抄録誌を知り、図書館情報学の適用

の実際を肌で感じることができるという期待ができる場だということである。

具体的にいうとこうである。たとえば、**Chemical Abstracts**というひとつの抄録誌は、一個の独立した巨大な図書館といえるのではないか。そのCAは、抄録というレコードあるいは記入単位といえるものによって構成されている。その抄録は、書誌事項と

抄録から構成され、そこでの記述は規則だった表記法にもとずいている。また、抄録は、80のセクションに分類され配列⁽¹⁾されている。一方、抄録は、索引によって、もうひとつのアクセスポイントから行きつけるのである。それは、著者名であったり、主題語であったりする。そこでの見出し語も、ぼう大な情報を、いろんな利用者が使いやすいように規則だったものになっている。

であるから、私たちは、CAをみていく中でも、利用者の便を考えて、情報を標準化して蓄積し、いろんな観点から情報を検索できるようにしているひとつの図書館活動をみていくことになるのである。そして、そここでなされる議論は、目録規則のことだろうし、分類のことだろうし、標目のことだろうし、シソーラスのことだろうし、索引のことなのである。

だから、化学系の図書館以外の方も、ぜひCAに関心をもっていたきたい。CAは最も洗練された、学ぶべき図書館のひとつだからである。

第1章 Chemical Abstracts

第1節 Issue (つづき)

④ Keyword Index

CAの各号の末尾には、3種類のIndexがついている。順に Keyword Index, Patent Index, Author Index である。

まず、Keyword Indexについて説明する。Keyword Index は主題語から該当文献に到達すべき Index である。

本講義のテキストから、Keyword Index についての説明を箇条書きに揭げてみよう。

(笹本CA p. 55による)

- current awareness 用である。
- キーワードは、文献の標題と抄録から、1抄録あたり平均4ないし5個抽出。
- issue index として速報性に主眼点があるので、用語が統一されていない。

さて、Keyword Indexの記述の実際については、実物をみられるほか、テキストと

して化情協CA p. 139をみられたい。

見出し語がアルファベット順に並び、それぞれの見出し語の下に、2文字右さげでフレーズでもう一度、ある主題のどの側面について論じてあるのかを説明している。そのあと、抄録番号を記述して、対応する抄録にいきつけるようにしてある。このIndexをみると、複雑な構造であると思うかもしれない。しかし、驚くことはない。このような索引の記述方式は、べつにCAに限らず、いろんな本でよく利用されているからである。

このIndexの注意点は、見出し語が非統制語⁽²⁾でできているので、考えられる同義語で見出し語をすべてチェックする必要がある⁽³⁾ということだろう。たとえば、化学物質の場合こうである。個々の化学物質については、CASの命名法に従って体系だった索引名をもっているのであるが、その索引名は、Volume IndexのひとつであるChemical Substance Indexで使われる。Keyword Indexでは、慣用名・商品名を含め、著者が使った用語が用いられる。だから、ある化学物質についての同義語⁽⁴⁾を見出し語としているかどうか、すべてチェックすることになる。

注

- (1) 前回説明したCAの略語の問題もこの中に入ろう。
- (2) たとえば、本講義第1回で引用した長沢雅男「情報検索入門」の索引をみられたい。たとえば、p. 214をみると、

分類
階層分類
組合せ分類
分類表

⋮

というふうに見出しが構成されている。

- (3) 検索語の選択は冊子体による場合でもオンライン検索する場合でも、重要な問題である。それは、ある検索語を選ばなかったために検索漏れが生じるからである。とくに、オンライン検索の場合、単数形か複数

形かといったスプリング上の単純なことでさえ、検索漏れの原因となる。なお、Keyword Index のキーワード・フレーズのガイドラインが、CA Search チャ

プター日本語版(紀伊國屋書店) p. 311-24 以下にある。参照されたい。
(4) 化情協 C A p. 140

— 文 献 紹 介 —

「ライフ・サイエンス関係文献解説集
1988年度版」

徳島大学附属図書館蔵本分館編集・発行
B 5 版 86ページ 1988年

本書は、二次資料の使い方の解説書である。とりあげられている二次資料を列記すると、

Current Contents
Beilsteins Handbuch der
Organischen Chemie
Gmelins Handbuch der An-
organischen Chemie
Index Medicus
Index to Dental Literature
Biological Abstracts
Biological Abstracts/RRM
Chemical Abstracts
Excerpta Medica

医学中央雑誌
科学技術文献速報

である。

CA や Index Medicus といった二大資

料についての解説書はいくつかあるが、Current Contents や最近の Biological Abstracts について、こういった形で解説されたものを知らなかった。私のところの図書室でも、先輩につれられてきた学生さんが、Current Contents の使い方を手とり足とり教えてもらって風景に接することがあるが、このような形に残った解説をしてもらえる。徳島大学蔵本地区の利用者の方は幸せである。

解説も丁寧で、かゆいところに手が届く、という感じである。

現在は、徳島大学医学部栄養学科、薬学部学生のガイダンスとして使用されているとのことであり、巻末に各学生対象に演習問題を載せている。

本書は、利用者だけでなく、二次資料を学ぶ図書館員の教科書としても最適であり、演習問題をやって、利用の仕方を憶えたい。

ともかくも、この解説書をつくられた蔵本分館の方々に敬意を表して紹介をおわる。

(京都大学薬学部・菅 修一)

大学図書館問題研究会第19回全国大会

◆と き 1988年8月6日(土)~8日(月)

◆と ころ 名古屋サンプラザ 名古屋市中区藤里町1601 番(052)774-0211

◆<日 程>

	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
8/6 (土)		支部活動 交流会	受付	開 催 会 案	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議	全 体 討 議
8/7 (日)		分 科 会	昼 食	休 憩	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会	分 科 会
8/8 (月)		主 題 別 交 流 会	昼 食	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会	全 体 会

注) 8/7 12:00 記念撮影